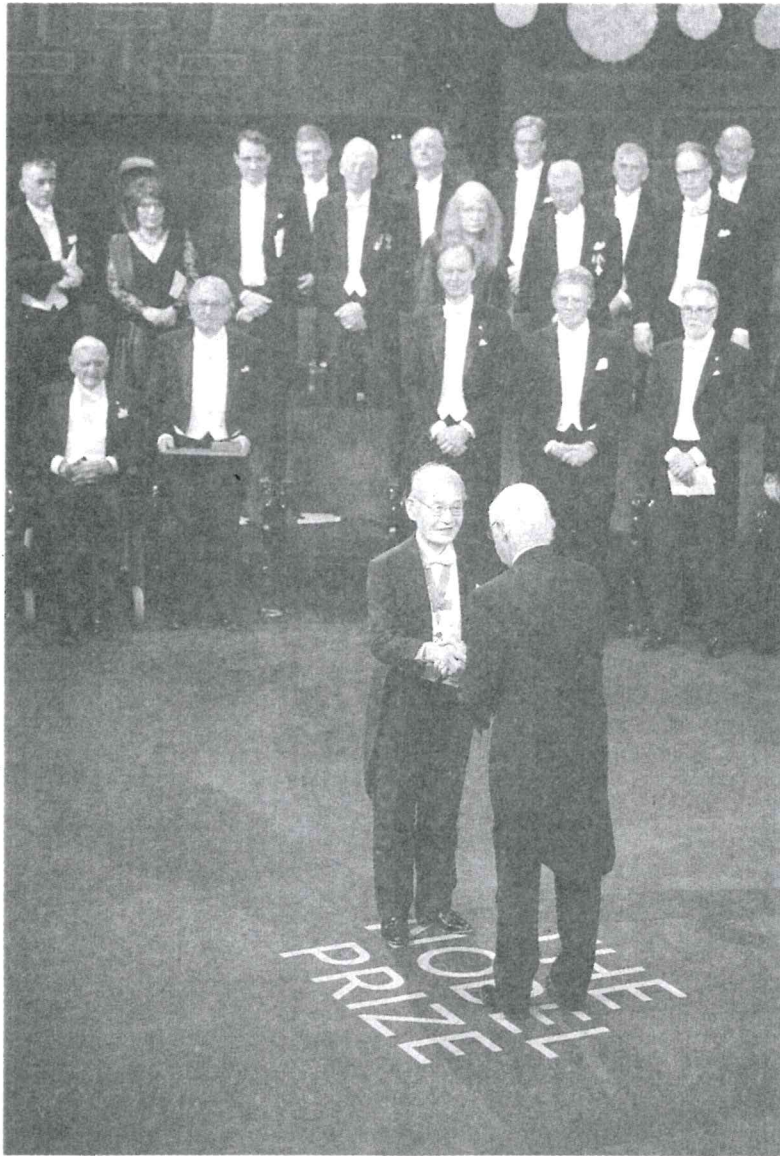


ノーベル化学賞 吉野さんにメダル授与 重みずっしり「実感湧いた」



ノーベル賞授賞式で、スウェーデンのカール16世グスタフ国王（手前）からメダルと賞状を授与される旭化成名誉フェローの吉野彰さん（10日、ストックホルムのコンサートホール）＝時事

【ストックホルム時事】コンサートホールで開かれた今年のノーベル賞授賞式が10日夕（日本時間11日未明）、ストックホルムの

野さんは、客席に妻久美子さん（71）らの姿を認めると笑みをこぼした。メダルを受け取り、大きく重かった」という。

吉野 彰氏（よしのあきら）旭化成名誉フェロー。1948年1月、大阪府吹田市生まれ。72年3月、京都大学大学院工学研究科修士課程修了、同年4月に旭化成入社。電池材料事業開発室長などを

経て、2017年10月から現職。技術研究組合リチウムイオン電池材料評価研究センター理事長や名城大教授などを兼務。18年日本国際賞、19年欧州発明家賞。同年文化勲章受章。

授賞式後には、市庁舎で開催された晩さん会に久美子さんと共に出席。滞在先のホテルに戻った際、「やっと受賞した実感が湧いてきた」と笑顔で語った。

吉野さんは1983年、二つある電極のうち、負極に電気を通すプラスチック「ポリアセチレン」、正極にコバルト酸リチウムを用いた電池を試作。85年に負極を炭素材料に代え、現在使われているリチウムイオン電池の基本形を完成させた。軽量化で出力が強くなり、充電できるリチウムイオン電池は、ノートパソコンや携帯電話、スマートフォン

の普及に貢献し、

共同受賞者のスタンリー・ウィットキンガム米ニューヨーク州立大卓越教授（77）は70年代にリチウムを使った充電電池を提案。ジョン・グッドイナフ米テキサス大教授（97）は80年、コバルト酸リチウムが正極に適していることを発見した。日本人のノーベル賞受賞は昨年の本庶佑・京都大特別教授（77）に続き27人目。

吉野さんは14日にストックホルムをたち、15日午前に帰国する。

（4面に関連記事）

研究を地域に還元したい

岡

野口賞 池脇九保大教授が講演

延岡



産学連携の成果を発表する池脇教授(6日、延岡市の旭化成向陽倶楽部)

野口遵顕彰会が創設している「野口賞」で2002年、最初に大賞を受賞した九州保健福祉大学生命医科学部長の池脇信直教授が6日、延岡市の

旭化成向陽倶楽部で講演した。自身の研究成果を基に産学連携で誕生した生物製剤や水素ガス発生装置を紹介。「大学のリソースを活用し地域や社会

に還元していくことが重要になってきている」と話した。池脇教授は、免疫システムを利用して開発した抗体に分子がどのように

反応するかで病気の診断や治療に役立てようとする研究で、独自の研究開発で顕著な業績が見込まれる企業や個人に贈られる野口賞を受賞した。

池脇教授は大学の研究はいかにして社会に還元するかが重要になってきていると指摘。産学連携に注目が集まり、自身が学んだ北里大学の建学の精神に影響を受け「何か社会に還元できるようなものにしよう」と研究を進めてきたという。

野口賞を受賞した研究はその後、愛知県のML

B社から生物製剤として全世界に向けて発売され、製品名には池脇教授

の名を冠した「mNII」が付けられた。mNIIはがんの転移や動脈硬化、免疫システムの解明やIPS細胞の研究などに応用が期待されるという。

アースエンジニアリングと開発した水素ガス発生装置「スイソニア」は、700度まで熱した水から水素を抜き出すことで空気中の2000〜6000倍の濃度で水素を吸入できる。生活習慣病など疾病の予防や治療、血流増加による体力増強に

貢献できるといいう。パキスタンでは透析患者向けの利用研究が進んでいるほか、2020年の東京五輪ではアスリートの健康に貢献できるように「選手活躍の一翼を担える。導入を目指していきたい」という。

ほかにもリラックス作用があると考えられる「GABA(ギャバ)」などの研究も進めてきた池脇教授。「モチベーションはまだある。開発や実用化と聞くと胸が躍る」と意欲を見せた。